S1M NEWS

March 2015 No.6

SCHOLARONE MANUSCRIPTS™

■「出版倫理セミナー」開催レポート
■CrossCheck/iThenticateデータベースについて
■S1Mユーザーカンファレンスプログラム募集

出版倫理セミナー

開催レポート

COPEの委員長、JAMJEの議長も登壇。2015年1月、2月 出版倫理セミナーを連続開催しました。

世界中の編集者が倫理規範の拠り所としているCOPE（Committee on Publication Ethics=出版倫理委員会）の委員長やJAMJE（Japanese Association of Medical Journal Editors=日本医学雑誌編集者会議）の議長による講演とあって、2つのセミナーともに大勢のお客様にお集まりいただきました。その様子をレポートします。

COPE 前委員長
Liz Wager 氏

COPE 現委員長
Virginia Barbour 氏

JAMJE 議長
北村　聖 教授

2015年1月20日には、TKP大手町ビジネスセンターにて、「出版倫理セミナー ～Liz Wager氏（COPE前委員長）が語る、学術ジャーナルが取り組むべき出版倫理～」と題し、UniBio Pressと杏林舎が共同で開催しました。

COPE前委員長が提唱する不正を見抜く7つのポイント

COPE前委員長のWager氏には、出版倫理における諸問題について、「倫理」や「不正」の定義から、不正を見抜く際に着目すべき7つのポイント等最新の知見を語っていただきました。

1. 非倫理的研究、倫理機関からの同意を得ていない研究
2. Authorship（オーサーシップ）
3. 剽窃
4. 重複出版（自己盗用）
5. 先入観が含まれているレポート
6. 画像の改ざん
7. COI（利益相反）

それぞれの項目について、分かりやすい例を提示し、COPEのガイドラインを基にして詳しく解説されました。

例えばオーサーシップについては、 ”The NEW ENGLAND JOURNAL of MEDICINE”が出版したThe GUSTO studyでは、著者が972人もいるとの衝撃的な例示がありました。この場合、全員が著者であるとは到底考えにくく、論文の作成に大きく関わった者以外はContributor（貢献者）として別枠で、名前と携わった作業の内容を記すべきとの見解を示されました。

また、剽窃に関しては、ソフトウェアやデータベースを使用した「スクリーニング」を、どのタイミングで、どのように行うか、ジャーナルとしての確固たるポリシーを持つことが重要と述べられました。

この日は、杏林舎の真鍋による発表も行われました。ScholarOne Manuscripts（S1M）の概要と特長をご紹介した後に、S1Mにおける提出書類の回収方法について、「e-form」機能を中心に説明いたしました。

コピペし放題?! “日本語論文”の不正をなくすために

2月4日の「出版倫理と日本語の公正な論文発表のための仕組みを考えるセミナー」は、iParadigms LLC/iGroup（Asia Pacific）主催、JAMJE、日本疫学会、杏林舎の協力で行われました。会場は、歴史ある重厚な造りで、アカデミックな雰囲気が漂う東京大学の講堂です。

JAMJEの議長で、東京大学教授の北村聖氏による刺激的な発言で幕を開けました。

「本日のセミナーのタイトルは、なぜ“日本語の”としているのでしょうか。欧文と比べて、日本語のジャーナルはオンライン化やオープンアクセス化が進んでいません。そして、CrossCheckは日本語に対応していない。まさに日本語論文はコピペし放題と言えます。この問題をクリアする第一歩として、このセミナーを開催いたします」

The elephant（s）in the room 見て見ぬふりをしていませんか?

COPEの委員長を務めるVirginia Barbour氏の講演「出版と研究倫理：無視できない密接な関係」では、研究や出版の過程は多様であり、そこに起こる不正にも大小様々なものがあることが語られた後、不正は一般的に起きていることであると主張されました。

著者を対象に行ったあるアンケート結果によると、14%が他人の不正に気付いていたと回答し、2%は自分が不正を行ったと認めている。しかし、明るみに出ることが少ないのは、編集者が自分のジャーナルでは起こりえないと考えているからと指摘しました。その思い込みを取り払い、問題の解決には時間、お金、マンパワー、考え方の変革が必要であることを肝に銘じなければならないと述べました。

不正に立ち向かう戦略としては、以下の3つを挙げ、それぞれを掘り下げて説明されました。

1.早い段階での検知
2.COPE等を通じた教育とサポート
3.背景にある文化など、不正の根本的な原因を正す

特に3については、”The elephant（s）in the room“という表現を使って、日頃から問題に気付いていながら、見て見ぬふりをする精神風土を断ち切りましょうと呼び掛けました。

今こそ、日本語版CrossCheckの構築を

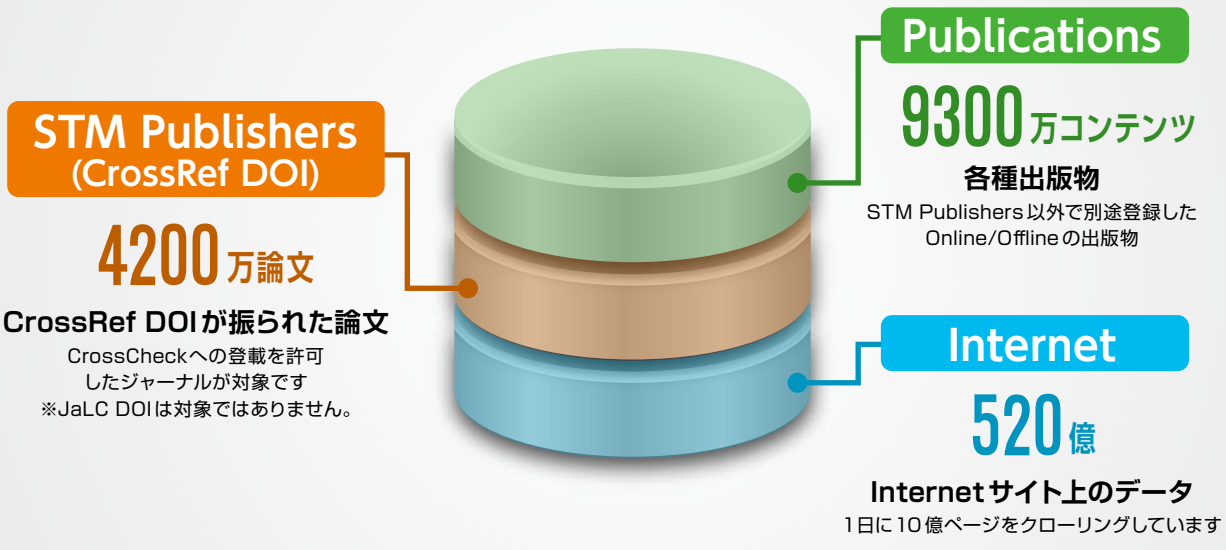
北村聖教授には、「医学研究成果公表における著者資格と研究不正およびその防止」と題して、国内外の論文不正に関する歴史、オーサーシップについての最近の知見や“バンクーバースタイル”の変遷等、教育者の立場から、ユーモアを交えて分かりやすくご講演いただきました。

ジャーナルの編集者として具体的にどのように不正と向き合い、出版倫理に取り組んでいるのか、日本疫学会の橋本勝美氏に「日本疫学会誌における出版倫理に関する取組み」を発表していただきました。発表後には、同じ編集者としての意見や経験談を聞きたいと、参加者からの質問が相次ぎました。

その他、J-STAGEの杉本樹信氏による「わが国におけるOAプラットフォームと出版倫理（J-STAGEの観点から）」、杏林舎の鳥海による「ScholarOne Manuscriptsでの不正論文チェック」、まとめとして、iGroup Japanの笠間和喜氏より「学術出版社の剽窃チェックのためのアイディア-日本語版CrossCheck構築のお願い」と題した発表が行われました。日本語の剽窃チェックツール=CrossCheck構築の必要性、ひいては、学協会や出版社等、学術出版界全体が協力して不正に立ち向かっていくことの重要性が語られると、参加者より、どのように協力できるのか等の質問がありました。

今後も杏林舎は、論文の不正をなくすために、ホームページやイベント等で、皆様に情報発信を行っていきたいと考えております。

CrossCheck / iThenticate データベース



これまでのセミナーやS1M Newsにて、CrossCheckについてご紹介いたしましたが、ここで、CrossCheckが論文の剽窃をチェックをするのに、どのようなデータを参照しているかをご紹介します。
CrossCheckは、iThenticateというテキストを比較するソフトウェアを利用したサービスで、その中には左記のデータベースが登載されています。

チェックをして一致率を調べることとチェックの対象とすることは異なります。論文をデータベースに入れ、チェックの対象とすることで論文の著作権が守られます！
CrossRef DOIが振られていないジャーナルで、CrossCheckへの登載をご検討の際は、iGroup JAPAN（info@igroupjapan.com）へお問い合わせください。

SCHOLARONE MANUSCRIPTS ワークショップ

第５回を終えて

S1M ワークショップの第５回目を３月 24 ～ 26 日の３日間で開催しました。今回は、S1M のご利用期間が１年前後のユーザー様と、ご利用歴を問わず、基本操作を改めてご確認されたい方を対象とし、23 ジャーナルの編集事務局ご担当者様にご参加いただきました。

「事務局の基本的な操作に加えて、編集委員や査読者など事務局以外のロールの作業も理解して、投稿受付から入稿までの一連の操作を確認しましょう！」をテーマとし、論文画面（論文情報、履歴、ファイル管理）の見方、投稿受付から採否決定までの基本操作、および採択後の処理（Batch、発行管理）などについて取り上げました。

投稿受付から結果通知までの基本的な操作は、日常の業務で行っているので自信があったが、採択後については、最終データや Batch 処理について詳しく再確認できて良かった等のお声をいただきました。

次回は５月末頃を予定しており、「レポート機能」、もしくは「E-Mail テンプレート」について取り上げる予定です。詳細が確定しましたら、メールでご案内いたします。

国内のS1Mご利用学協会様に向けたユーザーカンファレンスを毎年弊社で開催しておりますが、それと同様にS1Mの開発元であるThomson Reutersが世界中のS1M利用学協会・出版社・販売代理店に向けて毎年開催している「ScholarOne Manuscripts User Conference」が今年は4月15～16日にポルトガルのリズボンで開催されます。
User Conferenceで はCOPEのChris Graf氏 やNew England Journal of MedicineのStephen Morrisey氏による出版倫理やオーサーシップについての講演の他、S1Mの運用事例や新機能、ロードマップなどを含めた様々なプログラムが予定されています。
また、User Conference の前日に催されるTrainingに今年も招待されまして、杏林舎から鳥海と真鍋が参加して参ります。今回は、主にオプション機能の実用的な運用および設定方法や、それらの機能を海外の学会がどのように利用されているかを確認する予定です。
この機会に得る新たな知識と技能を活用し、今後も皆様により快適なS1Mのご利用環境を提供できればと考えています。
参加レポートは6月に発行予定のS1M NEWSに掲載いたしますので、楽しみにお待ちください！

「ScholarOne Manuscripts User Conference」と「Configuration Training」に参加します！

本家ユーザーカンファレンス

開催予告 第4回 SCHOLARONE MANUSCRIPTS ユーザーカンファレンス

2012年に開始しました国内のS1Mご利用ユーザー様向けの「ScholarOne Manuscripts ユーザーカンファレンス」を今年も開催いたします。昨年の第３回では出版倫理をテーマに東京大学医学教育国際協力研究センター教授・日本医学雑誌編集者会議（JAMJE）組織委員会委員長の北村聖先生に特別講演を行っていただきました。
4回目を迎える今年のユーザーカンファレンスで取り上げて欲しいトピックなどがございましたら、ぜひ杏林舎のScholarOneサポートセンターまでご意見をお聞かせください！

2015

編集後記

桜もあちらこちらで咲き始める時期になりました。
今号では、1月、2月と続けて開催した出版倫理セミナーについて１面でご報告をいたしました。
昨年のS1Mユーザーカンファレンスでもテーマとして取り上げておりましたが、「出版倫理」は、学術出版界において非常に多くの関心を集めている問題で、どちらの学協会様でもその取り組み方について問われる機会が増えていることと思います。弊社としましても皆様に新たな視点や問題解決法となる情報を今後もお届けしていきたいと考えております。
まもなく、事務局用のマニュアルが完成します。今までご不便をお掛けしておりまして申し訳ございませんでした。４月中にお届けできるよう努めておりますので、もう少々お待ちください。（鳥海 英夫）

［お詫び］前号にて「2014年の新規導入ジャーナル」を掲載いたしましたが、日本輸血・細胞治療学会様が記載されておりませんでした。大変失礼いたしました。

S1M NEWS
2015年3月31日発行　第6号

発行　株式会社 杏林舎
〒114-0024 東京都北区西ヶ原3-46-10
TEL.03-3910-4311
FAX.03-3949-0230
URL http://www.kyorin.co.jp
編集・制作・デザイン　株式会社 杏林舎
E-mail　s1mnl@kyorin.co.jp

©株式会社 杏林舎　本誌掲載の記事・写真・イラストレーション等の無断転載を禁じます。

次号 2015年 6月発行予定

Auto-Decline と Alternate Reviewer について

Auto-Decline：
査読や執筆の打診に対して一定期間返答がなかった場合、自動的に「Declined（辞退）」とする機能です。

Alternate Reviewer：
「Declined（辞退）」になった場合、自動的に次の査読者候補「Alternate Reviewer」へ依頼を行う機能です。

この二つを組み合わせると、「依頼から一定期間返答がなかった場合は自動的に辞退と見なし、次の候補者に依頼する」という一連の作業を自動化できます。
どちらも弊社での設定が必要となりますので、ご希望の際はご連絡ください。

こんにちは！学術ソリューション課の山田です。
4月を迎えて心機一転、今年度もお役に立てるよう頑張ります！
さて、今回のテーマは「Auto-Decline」と「Alternate Reviewer」です。
二つの機能を組み合わせることで査読者をアサインする際の手間が大きく削減できますよ。